

〈実践報告〉

創造的な社会科の授業づくりに向けて

長谷 充 康

はじめに

“生きる力”を育てる、そんな風に教育界で言われだして久しい。なぜ、“生きる力”か？文部科学省は平成8年の中央教育審議会の答申（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」）の中で次のように述べている。

我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を“生きる力”と称することとし、これらをバランスよく育ていくことが重要であると考えた。

確かに、21世紀の時代は今までとは違った困難を伴った社会がやってくるのだらうと思うのだが、その未知の困難を自らの人生の中で切り拓いていくのは、一人ずつの創造力である。そして子ども達に“創造力を育む学習活動”を提供しようと考えれば、教員自身に求められるものもまた創造的に生きる姿勢、創造的に仕事をする姿勢である。

私は、教員を問わず学生諸子にも創造的に生き、創造的に学習する姿勢、自ら学び自ら考える姿勢、そして、自分のアイデンティティを磨き、子ども達が喜んで学ぶ授業づくりには励む姿勢を持ってもらいたいと願っている。

1. 「社会」とは

「社会」が指し示している内容は、茫漠として広い。

「人間は一人では生きていけない」という言葉がある。確かにそうである。力を合わせて物をつくり、分け合って食べていかなければ生きていけない存在である。そして、そんな

生活の中から、私たちの祖先は言葉と文字とを使って文化を創り上げてきた。そう考えると、私たちの身の周りのものほとんど全てが「社会」の対象となってくる。

しかし、私たちの今ここで考えようとする「社会」は、“小学校教員を目ざす学生”として、知り、考えておかなければならない「社会」である。

講座の初めに学生に訊いてみる。「小・中・高等学校と社会科の勉強をしてきて、その授業は好きでしたか？」多くの学生の答えは、否である。

私は、講座を2つの内容に分けている。1つは「社会」であり、もう1つは「社会科指導法」である。社会科を教えるにあたって身に付けておくべき知識を得るのが「社会」であり、それを具体的に文部科学省の学習指導要領を参照しながら子ども達にどう教えていくのかを学ぶのが「社会科指導法」である。社会科指導法を学ぶ前に、社会についての知識・認識を持つことは当然に必要な不可欠であると考えている。

小学校社会科を分野ごとに分けると、「地域や我が国の国土の地理的環境」、「現代社会の仕組みや働き」、「地域や我が国の歴史や伝統と文化」と分けられる（「新学習指導要領第2節社会第1目標」から抜粋）。講座「社会」ではこれらの分野について一般的な知識を得ることになる。そして、それと同時に先に紹介した社会科は好きではないという意識を払拭することが必要となってくる。

小学校社会科に目標を絞っても、その内容は茫漠として広い。その中から、少なくとも必要と考えられる知識を獲得していくには、自分の住んでいる地域に対して、自分の国の歴史について関心を寄せることが大切である。そして、自分で関心をもって調べてみる事が一番に身に付く学習である。また、現代的な課題に関心を寄せることも大切である。私たちは、子ども達に現代の課題を見つめることから、未来のよりよい社会を目ざすための認識と姿勢の基礎づくりをしていくのである。幼・小・中・高等学校を問わず教員を目ざす学生は、現代の問題を知り、自分の考えを持ち、課題を解決していこうとする積極的姿勢を持たなければならない。

新聞を読み、ニュースを見、そして、旅行に出かけなければならない。人やその文化に触れ、自らの見聞を広げていくことが請われる。講座は、その為の知識・考え方・調べ方などを示し、学生の意欲と関心を喚起するものになっている。

2. 小学校社会科の目標について

新学習指導要領には、次のように記載されている。

第2節 社会

第1 目標

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

この記述の後に、(1)～(3)としてより具体的な文言が続き、情報を適切に調べまとめる技能習得の重要性についても書かれているが、これまでの社会科の目標とされてきた「社会についての認識を深めるとともに、公民的資質の基礎を養う」という大きな目標は引き継がれている。そして、「公民的資質の基礎を養う」が究極の目標であることも変わっていないと考えられる。

しかし、学生は小・中学校の社会科、高等学校の公民科の中でこの「公民的資質」という言葉に何度も出会ってきているだろうと思うが、公民的資質をどのようにして社会科の学習活動の中で養うのか、公民的資質が育つとはどういうことなのか、具体的なイメージはほとんど持ち合わせていないというのが実情だと考えられる。

私は講座の中で、学習指導要領を教科書としてよく使用している。その文字・文章を追いつながりながら、その意図するところについて具体的実践事例を提示しながら学生の理解を深めるようにしている。

平成29年度の「社会」の講座では、実際の「パンを作る」の実践事例をもとにして、公民的資質の育成について次のように学生に提示した。

ある小学校2年生の授業風景である。教材のテーマは「パンを作る」であるが、子どもたちはプランターで小麦を育てるところから授業を始める。その小麦が育ったころ、実際の農家に行き畑の小麦を刈らせてもらう。そこからのパンづくりである。

クラスをいくつかのグループに分けてパン作りに取り組むが、作り方は自分たちで調べ、そして相談しながらパン作りを進めていく。先生は各グループのパン作りの工程を見守ってはいるが、決して指示は出さない。もしパンを焼く温度とか、その設定を子どもたちが間違っていたとしても子どもたちの仕方に任せている。やはり、どのグループも焦げたり堅かったりになって、1回目は失敗に終わってしまう。子ども達は、夏休み中に自分たちで調べ、家でも作ってみたりと、試行錯誤を繰り返して2学期、再挑戦する。

授業での子ども達の表情は明るい。そして、自信とやる気が満ちている。出来上がったパンは、ホカホカとして美味しそう。子ども達の笑顔とともに、歓声が響いている。

わずか5、6分間のビデオだが、製作者（当該学校）のナレーションが入っている。「『パンを作る』の授業は、パンを作る技術を教える事だけが目的ではない」と。私は、このビデオを観たあと、学生たちとまとめをする。例えば、板書は次のようになっている。

<p><板書> 『パンを作る』 <小麦を育てる></p>	<p><パンを作る></p>
<p>○プランターで小麦を育てる。 （種まき、水やり） ○農家の畑で、小麦を刈らせてもらう。 子ども達はたくさん的小麦を手にする。</p>	<p>○小麦を製粉する。 ○パンの生地をつくる。 容器に入れて発酵させる。 ○パンを焼く。 ○試食する。</p>
<p><小麦の歴史> ・11,000年前から栽培が始まる。 ・エジプトやメソポタミアの文明を支える。 ・現代でも多くの国で栽培され、食料として大きな役割を果たしている。</p>	<p><パンの作り方を学ぶ> ・パンのこね方 ・パンを焼く温度 ・おいしいパンの作り方</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>聞き取りや試行錯誤 グループの中での共同</p> </div>

学習指導要領を参照しながら、この授業の[知識・理解]の部分、[調べる・探究する]の部分、そして[公民的資質の育成]と関わる部分の観点で授業分析を行う。そして、公民的資質の育成と関わる部分でのまとめは次のようになっている。

『日々、何気なく食べているパンが小麦からできており、小麦は古代から人間の生活を支える大切な食料として栽培され、改良を加えながら受け継がれてきたものである。そして、私たちが日々食しているパンは、“美味しいパンを作ろう”とするパン職人さんの努力と工夫を経て出来上がってきたものである。それを、五感を通して知ることが公民的資質の育成に繋がっていくと言えるのである。』

講座での学生の受け止めに現す資料として、感想文を2例掲載しておく。

学生1.

授業記録のビデオを観て、パンのように日常的に食べていても、何からできているのか分からないとか、そういうものは小学生には多いと改めて考えた。そう考えると、パンができるまでにいろいろな人の協力があることや、簡単に作られたものじゃないことを知ることが出来るので、子どもたちにとっては大切なことだなあと考えた。食べ物を大切になどよく言うが、なぜ大切にしないといけないのかという“なぜ”の部

分から勉強できる授業はとてもいいと思った。

学生 2.

社会という科目は、大人になって生きていく上で必要不可欠なものだと思います。その授業の中で、体験することで初めて知ること、自分が考えたやり方でやってみることで大変さを分かること、実際作っている人の気持ちになることなどを通して社会とのかかわりを勉強していくんだなと思いました。自分が大変だと感じたものはやっている人はもっと大変なんだ!と思うことで、違うことでも自分が何かする時、喜んでもらいたいという思いに変わるのだなと感じました。誰かに喜んでもらいたいと思える心を養うのが社会なのではと思います。

3. 社会科の授業づくりについて

社会科の授業づくりは難しい。社会科の範囲は茫漠として広い。その広い範囲の事柄を社会科の教科書は満遍なく、そして全国のどの小学校でも使用できるようにと一般化した形でその内容が記載されている。また、記述に使われている文言や漢字も、子ども達には馴染みの薄いものが多く、読みづらくてイメージしにくいものとなっている。

社会科の授業は教材作りが大切である。教材作りに求められる性質を3点挙げてみると、1つはその素材が子どもにとって身近なものであること。2つ目には現代社会の課題と結び付いていること。3つ目には子ども達が主体的に、そして興味を持って調べ探究できるものであることである。この3つの点から考えても、授業は「教科書を読む、そして内容を理解する」ということでは成立しない。教科書は学習の1つの出発点、教材の1つとしての役割を果たし、子ども達の学習活動は教科書をきっかけや学習素材としながら発展していく。だが、教科書は小学校社会科で学ぶべきものが分野を分けて、そして同心円的にも児童の発達を考えて配列され、また、調べ方やまとめ方などの身に付けるべき技能についての記述も含んでいるので、その有用性を認識し大いに活用するべきものでもあることは言うまでもない。しかし、学習指導要領中の配慮事項として記載されている授業内容の精選・重点化の問題や、資料活用能力の育成、探究力や郷土国を愛する心の育成等を考えると、教科書に掲載されている内容の取り扱いの軽重は当然に必要になってくる。

ここに、社会科授業の第一の難しさがある。内容の取り扱いの軽重を判断する力と、一般化されて書かれている教科書の内容を子どもの「身近な事柄」「現代社会と結びついた課題」として教材化していく力である。どちらの力も教員の社会に対する広い知識や現代社会に対する深い認識が必要となってくるものである。

第二の難しさは、子ども理解にある。授業づくりには目の前の子ども達が有する既存の知識についての把握が必要である。それと同時に子どもの興味・関心を引く事柄は何か、準

備した教材は興味を引き付けるものになっているか。そういった問いに対する答えも考えておく必要がある。

第三には、授業そのものの組み立ての難しさがある。社会科は講義形式で一方向的に教え込む形は馴染まない教科である。もしそんな授業をしてみたら、一遍に社会科嫌いが広がっていくだろう。社会科の授業では、提示した学習課題に対して子ども達が自らの経験や考え方・見方を表出させ、それらの交流と検討等を通しながら社会の真理に迫っていくという道筋を踏んでいく。子ども達の意見を引き出し、絡め合わせながら一人ずつが持っている社会的認識や公民的資質を育てていくのである。教師は、一つの授業の中でこれら様々な事を頭の中で融合させながら授業を方向付ける意思決定を何十回となく行っていかなければならない。豊かな子ども観、授業観、教材観が必要とされる。

以上、社会科授業づくりの難しさを述べてきたが、では学生諸子に何を要望するか。単純なことではあるが一番大切なことは「社会科が好きになること」「社会に興味を持つこと」である。特に、講座「社会」の中では、学生が「社会科はおもしろいな」「社会科を学ぶことは大人になっても必要なことだ」と思ってもらうことである。

そのためには、1つは新聞を読むことである。私はこの授業のオープニングに1つの新聞記事を使っている。朝日新聞に掲載された映画監督、是枝裕和氏の「二分法の世界観」(2014年2月15日付)である。初めてこの記事を講義に使った時は、少し不安があった。記事の文章の長さや内容の思想性である。現代社会の課題を見つめ、自身の問題意識や思想を語った文章になっている。文章を考えながら読み解いていく作業と、その内容・事柄に対する読み手自身の意見を構成するという作業が必要になってくる。

学生の反応は良好であった。新聞を読む学生は少数である。そして、ほとんどの学生はこのような社会問題を取り上げてのオピニオンを読んだことがない。しかしながら、自分が聞いたこともなかった新しい“社会に対する見方・考え方”に触れたこと、自分が住んでいる現代社会について改めて立ち止まって考えてみたこと、これらのことに学生は衝撃と魅力を感じ取っていた。

私は、この講義の続きとして現代を知り考える新聞記事を学生に紹介し、学生にも記事の切り抜きとレポートの提出を課す。社会科の授業づくりもさることながら、現代社会についての知識と認識を持つことは教員を目ざす者にとっての使命ともいえるものだと考えている。

次には文化に興味を持つことである。私は、講座の初めに自己紹介を兼ねて本学の教員になった時の感慨について触れることにしている。大学の所在地は河南町であるが、太子町に隣接している。学生に話しながら、「太子町?」。愚かなことに、私はこの「太子」の地名が聖徳太子の名号から由来していることに話しながら初めて気づいたのである。それと同時に、10年以上も前のことだが、近隣の藤井寺市の古墳から修羅が出土してきたという

記事のことも思い出されてきた。そして以前から気にかかっていた「竹内街道」もまた大学のすぐ側を通っていたのである。ここでまた「えっ!？」と思って調べてみると、聖徳太子の御廟もすぐ傍のお寺に安置されている。

遠く昔、難波津に着いた船から隊列を組み、インドやモンゴル、朝鮮や中国からの人々が色さまざまの衣装を身に付け、鉦を鳴らし、笛や太鼓をたたき、錦の旗を立ててすぐ傍を通って行っていたのである。また、聖徳太子の棺は、きっとその逆を、二上山の麓を厳かな隊列を組んで越えて来たのであろう。私は、いっぺんに歴史が身近になり、興味津々となったことを覚えている。

物事を知っていくには、興味を持つことが何よりも大切である。子どもへの学習課題の提示もそうである。いかにしてその課題に興味関心を抱かせるか。そのことが授業展開の鍵となってくる。ならば、子どもに教える側に立つ教員はなおのこと、教材への興味関心の惹起が必要となってくる。社会には、知り考えるべき問題が山ほどある。国や地域の歴史、工業生産や生活、文化、環境、国際問題等々。教員自身が社会に対して興味関心を豊かに持って、自ら調べてみようという関心を持つことが最も必要なことである。

私は学生に旅行をすすめる。観光旅行ではない。生身の人間に触れる旅行である。各地の人々の生活や土地の文化に触れる旅行。史跡や博物館など歴史に触れる旅行である。もし休暇中に郷里に帰ることがあるなら、近くの遺跡を訪ねる。縄文遺跡も弥生遺跡も全国に広がって存在している。また地域に伝統産業が息づいているなら、思い切ってその工房を訪ねることをすすめる。近年、土砂災害、地震や風水害、火山の噴火など災害に見舞われた土地も少なくない。私たちの住む国土は山が多く、平野が少ない。河川が多くきれいな水が流れていた。狭い国土の中で人々は工夫し、努力を重ねて生活の糧を得、そして独特の文化を育ててきた。学生の時代にしっかりと旅行をすることである。子どもと同様、学生も五感で人間の生活と文化に触れた時、心の中に自らのルーツ、日本文化のルーツに対する探究心と現代社会に対する問題意識が湧き上がって来るのである。

4. 学習指導案を書く

社会科指導法の講座目標は、学生が学習指導案を書けるようになることである。

指導案を書くにあたっては、まずは、文部科学省の学習指導要領の読み込みが必要である。講座の中で指導要領中のすべての事項にわたって読み込む時間はないが、その読み方、理解の方法について学生は学んでいく。作成する当該学年の指導要領の内容について理解した上で指導案作成に入っていく。

学生に最も身に付けてほしいところは教材観・指導観の記述である。本時の目標や評価項目、発問等、本時の展開も大切であるが、第一は教材観・指導観の記述である。

学習指導案の作成を課題として提示するにあたっては、いくつかの講義内容がその前段には必要である。1つは、学習課題（本時の単元）を選択することである。自分が作成しようとする指導案の単元を選び取らなければならない。小学校教科書及び資料集を手渡すのだが、学生はその中から1単元を選び出すことになる。この選択時に教員として必要な大切な力が必要になってくる。それは、「教師のアンテナ」と「教育感覚」である。

授業づくりにおいて、様々な題材・テーマの中から「これは！」というものを選択していく。この時に働くのが教師のアンテナと教育感覚である。教師という仕事を続けていく中で、最も大切にされるべきものである。「教師としての感性」と言ってもよいだろう。その作業は、日常的に「教育とは何か?」「教師とは何か?」を自らに問い続けるところから生まれてくるものであろう。その例として、生活科指導法の2016年度の冬季スクーリングの中で私が学生に課した「生活科で最も実践したいと考える学習活動は何か」の設問に対する解答文から見てみると、「私が低学年を持ったときに行いたい内容は『動くおもちゃ作り』」である。長谷先生からお借りした教科書を眺めていると、「おもちゃ作り」という部分が目に入った。最初は単純に楽しそうだと思って見ていたが、内容を深めていこうと教材化するために考えていくと…と文章が綴られている。受講者の授業づくりへの姿勢がよく出ている部分である。この姿勢は指導案づくりを重ねることで少しずつ身に付いていくものである。いつもアンテナを張り、子どもの喜ぶ顔と結び付けながら教材化を考える。一つのことを出発点としながら無いものから在るものを作り出していく。創造と想像の世界である。

指導案づくりにあたって、もう1例学生の解答例を挙げる。

2017年度、社会科指導法での事例である。この講座ではいくつかのテーマを学生に与え、そのテーマについて調べレポートにまとめるという課題が設定される。

設問は次のようになっている。

[設問1] 住んでいる土地の地理的条件を捉え、そこで行われている生産活動の概要を知る。可能なかぎりその土地の地形、気候、交通、歴史的背景との関係を考えてレポートにまとめなさい。

[設問2] あなたの住んでいる土地の農業・林業・水産業または工業について、特徴があると思う産業を選んで、5年生が分かるような説明をレポートにまとめなさい。

受講生の1人は『静岡県の製造業・工業について』と題して、次のような項目を立ててレポートにまとめている。

[学生レポート]

静岡県の人口は、全国の約3%にあたる3,698,000人だが、製造品出荷額は約5%と全国4位である。その理由として次の3点が考えられる。

1) 工場や企業の進出が盛んである。

2) 豊かな水資源に恵まれている。

3) “ものづくり”の伝統が生きている。

項目ごとの説明の後に「特徴的な産業について」として、

①自動車・自動車部品 ②二輪車・二輪車部品 ③電気・機械 ④紙・パルプ ⑤化学

⑥楽器 ⑦缶詰・飲料 ⑧伝統・地域産業

を挙げ、それぞれに数行の簡潔な説明文を付けている。

レポートを読めば県の産業の特徴が見えてくるとともに、県民の生活が地形や伝統を生かしてその生業を成り立たせてきたことが読み手に伝わってくるようになっている。こういったレポートの作成は、教員を志望する者の知識を増やすだけでなく、「学習するとはどういうことなのか」を再体験することになる。また、ひいては「授業づくりをするとはどういう作業を必要としてくるのか」ということの体験ともなっている。

私は、前者の学生解答が示した「教師としての感性を磨く」ことと、後者の学生レポートが示す「自らやってみてその楽しさと仕事のあり様を学ぶ」ことが、学生期に積んでおくべき体験であり、身に付けておくべき学力であると考えている。